

2022年度

教職課程

自己点検評価報告書

ノートルダム清心女子大学

2023年2月

ノートルダム清心女子大学 教職課程 及び 認定学部・学科一覧

初等教職課程

人間生活学部（児童学科）

中等教職課程

文学部（英語英文学科、日本語日本文学科、現代社会学科）

人間生活学部（人間生活学科、食品栄養学科）

大学としての全体評価

本学教職課程に関する全体評価としては、建学の精神に則った本学の教育理念に基づく指導体制の充実によって、これまでに多くの教員を養成し、地域社会に貢献して信頼を得てきたことが挙げられる。その要因は以下のとおりである。第一は、建学の精神及び理念に則り、全学的に教職課程における教員養成の目的、目標を共有して教育を実施していることである。第二は、初等教職課程及び中等教職課程を軸に、各学科教職課程における学生一人一人に応じたきめ細かな指導を基本としていることである。第三は、各学科教職課程における指導を基本としつつ、教職課程センターを中核として、全学的に教職課程を運営する体制を整備していることである。第四は、大学の理念に即して設置されたインクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、全学的にインクルーシブ教育を重視したカリキュラムを編成し教育を実施していることである。第五は、教育委員会との連携を図り、育成指標を踏まえた教員養成の実施に努めていることである。

その上で現在、緊要な課題となっていることは、情報通信技術を活用した教育の実施に必要な環境整備に努め、実践的な取組を充実させていくことである。今後も教職課程の実施に関する教職課程自己点検評価を充実させ、教職課程の質保証に向けて改善を図り社会に貢献できる女性教育者の養成に努める所存である。

ノートルダム清心女子大学

学 長 津 田 葵

目次

I	教職課程の現況及び特色	3
II	基準領域ごとの教職課程自己点検評価	5
	基準領域 1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な 取組	5
	基準領域 2 学生の確保・育成・キャリア支援	8
	基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム	12
III	総合評価	16
IV	「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス	16
V	現況基礎データ一覧	17

I 教職課程の現況及び特色

1 現況

(1) 大学名：ノートルダム清心女子大学

(2) 教育課程、学部、学科

初等教職課程

人間生活学部（児童学科）

中等教職課程

文学部（英語英文学科、日本語日本文学科、現代社会学科）

人間生活学部（人間生活学科、食品栄養学科）

(3) 所在地：岡山県岡山市北区伊福町2丁目16-9

(4) 学生数及び教員数（2022年5月1日現在）

学生数

初等教職課程

人間生活学部児童学科 教職課程履修 335名／学部全体 1,102名

中等教職課程

文学部英語英文学科 教職課程履修 53名／学部全体 733名

文学部日本語日本文学科 教職課程履修 56名／学部全体 733名

文学部現代社会学科 教職課程履修 23名／学部全体 733名

人間生活学部人間生活学科 教職課程履修 24名／学部全体 1,102名

人間生活学部食品栄養学科 教職課程履修 26名／学部全体 1,102名

教員数

初等教職課程

人間生活学部児童学科 教職課程科目担当 22名／学部全体 49名

中等教職課程

文学部英語英文学科 教職課程科目担当 11名／学部全体 35名

文学部日本語日本文学科 教職課程科目担当 10名／学部全体 35名

文学部現代社会学科 教職課程科目担当 11名／学部全体 35名

人間生活学部人間生活学科 教職課程科目担当 10名／学部全体 49名

人間生活学部食品栄養学科 教職課程科目担当 1名／学部全体 49名

2 特色

本学教職課程の特色は、設立母体であるカトリック教育修道会、ナミュール・ノートルダム修道女会の創立者、聖ジュリー・ビリアートが教育者の育成に力を注いだこ

とを踏まえて設置されていることにある。本学の建学の精神「心を清くし 愛の人であれ」は聖ジュリーのキリスト教的世界観を基底とした教育信念を表したことばであるが、それは、自らの人間性とそこに与えられている「良さ」を高め、そうした自己を他者のために使うことを意味している。

本学の教職課程では、聖ジュリーの精神を踏まえ、自ら生きる世界の中で、真に大切なことを見分け、愛を持って他者に寄り添い、社会に奉仕していくことのできる女性教育者を養成することを目指している。

本学教職課程においては、こうした理念に基づき、初等教職課程及び中等教職課程を軸に、各学科教職課程における取組を基本としつつ、教職課程センターを中核として全学的に教職課程を運営している。

さらに、大学の理念に即して設置されたインクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、全学的にインクルーシブ教育を重視した教員養成を行っている点に特色がある。

教職課程センターは、全学的な組織であり、教職課程を履修する学生の入学から卒業後までの教職に関わる業務を担っている。具体的には実践的な指導力を向上させるためのボランティア・インターンシップに関わる業務、教員採用試験対策の業務、卒業生支援に関する業務等である。

<根拠となる資料・データ等>

『フランス革命期の女性宗教者ジュリー・ビリアート』高木孝子 2000 南窓社 p42

II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取組

基準項目1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

自ら生きる世界の中で、真に大切なことを見分け、愛を持って他者に寄り添い、社会に奉仕していくことのできる女性教育者を養成する。

世界に知的まなざしを向けると同時に、他者との関わりを謙虚に見つめ、与えられたものの可能性を信頼しつつ自ら判断し、身近なところから他者とともに世界を平和でよりよいものとすることに貢献できる女性教育者を育成する。

〔現状説明〕

教職課程センターでは、初等教育課程および中等教育課程における実践的な指導力の向上、キャリア支援等を行っている。また、それらの業務を推進するために学内のインクルーシブ教育研究センターおよび教職相談員との連携、教育委員会との連携と情報収集を行っている。また、岡山県、岡山市、香川県等の教育委員会と連携して、本学対象の教員採用試験説明会および講師登録説明会を実施している。

初等教職課程では、教職員は、教職保育職の指導に関わる児童学科の教員で構成されている。年1回の初等教職課程・保育士課程連絡会と、学内e連絡システムの「2022 初等の会」のスレッドや児童学科会議の中で、教職履修、教育実習、教員採用試験、講師登録、学生の指導、卒業生支援の会などについて情報を交換・共有し、協議している。

中等教職課程では、教職員は教職課程センター事務職員及び各学科（英語英文学科、日本語日本文学科、現代社会学科、人間生活学科、食品栄養学科）の教職担当教員で構成されている。中等連絡協議会を年間9回開催し、教職履修、教育実習、教員採用試験、講師登録、学生の指導、卒業生支援などについて協議している。

〔長所・特色〕

初等教職課程では、教職に関わる授業だけでなく、「教職履修カルテ」、「教育実習日誌」等を活用して学生個別の指導、相談に対応している。学生個別の案件については学内e連絡システムの「2022 初等の会」のスレッドや児童学科会議の中で、教員間で情報を交換・共有し、協議している。

中等教職課程では、各学科の教員が「教職履修カルテ」、「教育実習日誌」等を授業だけでなく学生個別の指導や相談に活用している。それらの状況を、各学科の教職課程担当教員が学科内で情報共有するとともに、中等連絡協議会において協議、対応している。

〔取り組み上の課題〕

初等教職課程では、教職課程担当教員間で学内 e システムの「2022 初等の会」のスレッドや児童学科会議を通じて情報を交換・共有することに努める。

中等教職課程では、教職履修学生および教員が複数の学科に所属しているため、定例の中等連絡協議会以外に教職員間の情報共有、連絡調整に努めるとともに、学生への連絡、指導を適切に行うことが必要である。

＜根拠となる資料・データ等＞

- ・ノートルダム清心女子大学 諸課程年報 第 19 号
- ・ノートルダム清心女子大学 就職情報サマリー 2023
- ・ノートルダム清心女子大学 HP「教育ビジョン 2039」

<https://www.ndsu.ac.jp/vision/>

- ・NDSU ライフ 2022 pp.146-147

基準項目 1－2 教職課程に関する組織的工夫

〔現状説明〕

全学的に教職課程を履修する学生を支援する教職課程センターを設置している。コーディネーター 1 名（教職相談員兼務）、事務職員 1 名、臨時職員 1 名が主として業務を行う。

教職課程センター長 1 名（兼務）、教職課程センター教員 2 名（兼務）、教職相談員 6 名（幼保こ 3 名・小特 2 名・中高 1 名）は業務のほか個別学生指導も行い、必要に応じて、教職課程センター会議を行う。

教職課程教育を行う上での講義室の施設・設備の準備・調整を行い、ICT 機器を適切に利用した教育が可能となっている。また、教職課程の活動実績や研究等の情報公開を『諸課程年報』や本学ホームページ等で行っている。

学校現場の GIGA スクール対応として、クロムブックを 2021 年度 30 台、2022 年度 40 台、短焦点のプロジェクターを 2022 年度 2 台導入し、さらに一部の学科でデジタル教科書を整備して、学校現場と同様の環境を整備した。さらにそれらを各教科の教育法の授業等で活用することで、教育実習において ICT 活用に対応でき、教員として採用されたときに即戦力となる人材を育てている。

初等教職課程では、教職課程に関する情報を共有・協議するため、教員間での学内 e 連絡システムの活用、児童学科会議内での協議、毎年 2 月に初等教職課程・保育士課程

連絡会を開催している。

文部科学省によって示されている教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。また、教職課程センターと教職課程担当者として適切な役割分担を図っており、連携しながら教職課程のあり方についてよりよい改善を図るために、自己点検自己評価を適宜行っている。さらに、定期的に授業アンケート、FD、SD を行い、教職課程の質的向上に努めている。

中等教職課程では、文部科学省によって示されている教職課程認定基準を踏まえた教員を配置し、研究者教員と実務家教員及び事務職員との協働体制を構築している。また、教職課程センターと教職課程担当者として適切な役割分担を図っており、連携しながら教職課程のあり方についてよりよい改善を図るために、自己点検自己評価を適宜行っている。さらに、定期的に授業アンケート、FD、SD を行い、教職課程の質的向上に努めている。

〔長所・特色〕

教職課程センターでは、学校園の現場で校長や園長を経験した6名の教職相談員が、学生の進路に関わる相談や採用試験に関わる相談などに対応し、適切な助言を行っている。

初等教職課程では、地域のNPO法人、各事業所、県教育委員会、特別支援学校、幼稚園、小・中学校等と連携した取組を実施することで、学外組織と協働した指導の充実を図っている。

中等教職課程では教職課程センターと学部教職課程担当者として適切な役割分担を図っており、さらに学部間の連携を密にしながら教職課程のあり方によりよい改善を図っている。

〔取り組み上の課題〕

現在、教職課程センターは大学敷地内の周辺部にあり、利用するためには階段で3階にあがる必要があるため、場所的に学生が利用しにくい。学生が行きやすく、分かりやすい窓口があるとよい。

研究者教員と実務家教員及び事務職員と連携を図り実施しているが、全学的により組織的な協働体制を構築するために、教職課程センターと学部教職課程担当者との連携を強化することが今後の課題である。

<根拠となる資料・データ等>

- ・NDSU ライフ 2022 pp.146-147
- ・ノートルダム清心女子大学 Campus Guide 2023 pp.63

基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援

基準項目2-1 教職を担うべき適切な学生の確保・育成

〔現状説明〕

本学への入学希望者に対する教職課程についての情報は、「ノートルダム清心女子大学 Campus Guide」に掲載している。また、オープンキャンパスや高校訪問ガイダンスにおいて、教職の魅力、および教職課程の魅力を伝えている。

2022年度本学図書館の「NDSU 電子図書館」のジャンルに「教職課程」を新設して「教員養成セミナー」（時事通信出版局）および教員採用試験過去問題（先輩による復元問題）をオンラインで同時に多数の学生が閲覧できる環境を整備した。

初等教職課程では、児童学科のアドミッションポリシーに合った学生を入試で選抜している。特に総合型選抜の入試においては、面接での人間性の評価を重視している。

中等教職課程では、入学後の人材育成については、各学年で「教職課程説明会」を開催し、学生便覧を主な資料として、教職課程履修に関する情報提供を行っている。また、教員採用試験などの書籍を各学科の学生合同研究室に整備し、学生が自学自習できる環境づくりをしている。

〔長所・特色〕

教職課程センターの教職相談室では、教職についての相談や採用試験対策についてさまざまな支援を行っている。また、「ノートルダム清心女子大学 Campus Guide」に「教職・保育職支援」のページを設け、教職を目指す学生への学修支援及び教員採用試験対策講座の実施に関する情報を提供している。

初等教職課程では、オープンキャンパスの教員によるミニ講義時に、在学生に参加してもらうことで、高校生に入学後のビジョンを持たせる工夫をしている。その他に、児童学科パンフレット、高校訪問ガイダンス等で児童学科の魅力や学びを伝えている。

中等教職課程では、入学希望者に向けて配付される「ノートルダム清心女子大学 Campus Guide」の「卒業生からのメッセージ」において、卒業生が中学校、高等学校教諭として活躍する声や、教職を志望し夢を叶えた姿を掲載している。教職課程履修希望者へは、「教職課程説明会」を通して教職課程履修についての情報提供を行っているが、履修手続きの確認だけでなく、教職に就きたいという願いや志をもって粘り強い努力が積み重ねることができるよう、教職で求められる資質・能力について、改めて考えさせる説明会として位置付けている。

〔取り組み上の課題〕

初等教職課程では、教員志望の学生の減少、教員不足という社会状況の中、児童学科においても定員を満たしていない状況がある。教職の魅力の発信、児童学科の魅力の発信に努めているが、具体的な成果はまだ見られていない。本学の教職・保育職に係る免許や資格修得までの魅力について、HP やブログ等を利用して、高校生へ分かりやすく周知する必要がある。

中等教職課程では、必要な情報提供や細かな履修指導は行えているが、情報提供の質、量、時期などに関する適切なフィードバックが履修者から得られていない。今後は、ICT機器を利用したアンケートへの回答などを利用して、取組の在り方を改善する資料を整える必要がある。

<根拠となる資料・データ等>

- ・児童学科パンフレット「すべては子どものしあわせのために」
- ・ノートルダム清心女子大学 Campus Guide 2023 pp.63-64
- ・学生便覧 2022 pp.116

基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

〔現状説明〕

初等教職課程では、次のようなキャリア支援を実施している。

- ・1年次4月の教職指導、1年次9月の教職オリエンテーション、2年～4年次4月の教職オリエンテーションにおいて、教職課程の履修についてその意義や方法を丁寧に説明している。
- ・教職履修カルテによる個別支援（1年次から活用し、学修状況や成果、課題を学生自身が自覚できるよう、教員がコメント等助言）
- ・採用試験準備の個別支援（公立保育職については市町村単位で試験が行われるため、学生によって試験時期や試験内容等が異なる）
- ・特別支援教育の学びに関する助言（学校現場で必要とされる資質・能力について、免許状の取得について）
- ・小特コースは、「特別支援学校教員を目指して学ぶこと」と、「特別支援教育を学んだ上で小学校教員を目指すこと」の両方を指している。特別支援教育の学びに関する助言（学校現場で必要とされる基本的な資質・能力であること、免許状の取得について）を1年次から様々な機会に全学生に丁寧に説明している。

中等教職課程では、教職課程センターと各学科教員等が協働して、教員免許の取得や教職就業への意欲喚起と適性向上を目指し、入学当初から継続的に次のようなキャリア支援を実施している。

- ・教職課程説明会の実施（5学科合同による学年別説明会と各学科別説明会を毎年実施）
- ・教職履修カルテによる個別支援（個人の学修状況や成果の把握と課題の明確化を図り、助言）
- ・ボランティア参加支援（各教育委員会のボランティア情報の提供、学校支援ボランティア登録説明会の開催、附属小学校でのボランティア参加支援）
- ・教職相談室による個別支援（教職に関する不安や悩み及び教員採用試験出願に関する助言）
- ・選択科目「教職特講」による実践力強化（教育実習、採用試験、学校現場を想定した実践的指導）
- ・採用試験対策講座の実施（年間にわたって計画的に実施）
- ・情報提供の充実化（採用試験情報や対策講座等の案内を manaba forio で配信、附属図書館との連携により教育雑誌や採用試験受験報告書のデジタル情報提供）
- ・教職就業への直接的支援（各教育委員会と連携した採用試験説明会や講師登録説明会の実施による出願・受験・講師登録の促進）
- ・卒業生や在学生による教職就業意欲の喚起（採用試験対策講座等で受験者目線からの助言や激励）
- ・卒業生への支援（大学 HP に採用試験二次対策講座の情報を掲載）

〔長所・特色〕

教職課程センターでは、次のような取組を行っている。

- ・教職相談室では、教職についての相談や採用試験対策講座（各課程の校種ごとにそれぞれ年間 20 回程度）を行っている。教職相談員 6 名は学校園現場での校長や園長を経験者で、学生からの相談に適切な助言を行っている。また、インクルーシブ教育研究センターと連携した対策会では卒業生の受験者も参加できるよう、夜間の開催とするなどの工夫を行っている。
- ・教職学生閲覧室では、各自治体の採用試験過去問題、教職・保育職採用試験問題集、教科書、指導書を配架しており、教職・保育職に関連する求人票の閲覧が可能である。
- ・1 年次から 4 年次までの教職課程履修者を対象に採用試験対策講座を行っている。
- ・教育委員会による教員採用試験学内説明会や講師登録学内説明会を開催している。
- ・学生の採用試験対策として、附属図書館と業務連携し、電子図書館に月刊誌「教員養成セミナー」と教員採用試験過去問題（4 年生による復元問題）を掲載し、制限なしでア

クセスすることができるようにしている。

- ・初等教職課程と連携して、約2ヶ月に1回、卒業生支援の会を開催している。学校園の現場で働く卒業生に情報交換の場を提供し、日頃の授業や保育、学級経営の悩み等の相談に児童学科教員と教職相談員が応じている。

初等教職課程では、次の取組を行っている。

- ・クロムブック70台を授業用に確保し、国語、社会、算数、理科のデジタル教科書を授業で活用できるよう整備している。
- ・夏季休暇中の学内閉鎖期間中に教職を志望している学生・卒業生を対象に教員採用試験対策会を行っている。附属小学校の12の教室を会場に、模擬授業、面接等の練習を行っている。
- ・受験予定の市町村別に学生が主体的に試験対策を活発に行っており、教員も積極的に出向き、指導を行っている。
- ・特別支援教育に関連した学びを進められるよう、インクルーシブ教育研究センターと連携した取組を行っている。
- ・岡山県総合教育センターと共催した現職教員研修会へ学生が参加するなど、現職教員と直接に場を共にして学ぶ機会を積極的につくっている。

中等教職課程では、入学時から卒業時に至るまで、教職課程センター・中等教職課程・各学科担当者が中心となって常に連携を図りながら情報提供や個別支援などを通して、各学年段階に適した教職へのキャリア支援を年間にわたって継続実施している。

特に2010年に教職支援センターを設置して以降、毎年組織的に教職へのキャリア支援の充実を図ってきた。2022年度はコロナ禍において急速に整備が進んだ学内のデジタル環境を活用し、Zoomによる教職相談、manaba folioや電子図書館による情報提供の充実を図っている。

〔取り組み上の課題〕

初等教職課程では、私立や民間の幼稚園や保育所への就職希望者も増えており、学生一人一人の就職活動の把握が難しい。

中等教職課程では、コロナ感染症の拡大によりボランティアの見送りが多々見られ、未経験の学生が増えている。また、デジタル化を活用した情報提供を進めたが、十分とまでは言えない状況である。

<根拠となる資料・データ等>

- ・教職相談室利用状況 https://www.ndsu.ac.jp/career/situation_teach.php
- ・採用試験対策講座実施状況 https://www.ndsu.ac.jp/career/situation_teach.php

基準領域 3 適切な教職課程カリキュラム

基準項目 3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

〔現状説明〕

初等教職課程では、特別支援学校教諭免許取得に関連する科目だけではなく、すべての学生が特別支援について学びを深められるカリキュラムの編成が求められている。

中等教職課程では、カリキュラムの編成は「教育の基礎的理解に関する科目等」に対するコアカリキュラムについて、「教職課程認可基準」に基づく授業計画がシラバスに反映されたものとなっている。各学科におけるそれぞれの教科のコアカリキュラムについても同様である。また、インクルーシブ教育をカリキュラムに段階的に位置づけている。さらに、時間割の配置運用に当たっては、教職課程科目と教職課程以外の科目が適切に配置され、学生が無理なく教職課程を履修することが出来るよう配慮している。

〔長所・特色〕

初等教職課程では、1年次・2年次は基礎実習、3年次・4年次はインターンシップの授業をカリキュラム上に位置付け、学生のボランティア・インターンシップの活動を単位化している。また、1年次から、インクルーシブインターンシップの授業をカリキュラム上に位置付け、特別支援教育に関連する学生の活動を単位化している。

中等教職課程では、中等5学科（英語英文学科・日本語日本文学科・現代社会学科・人間生活学科・食品栄養学科）に、教職担当者各1名を必置として、それぞれの担当教員が各自の専門に関わる指導法等の科目以外に、5学科全員が履修する教職科目を担当することにより、学科の枠を超えて担当者全員が、中等教職履修学生全員を把握・理解しながら指導していく体制を整えている。この体制を支えるために、毎月1回、中等教職連絡協議会を実施して情報共有を図っている。

〔取り組み上の課題〕

初等教職課程では、授業と実践との両輪で学びを支えていく必要性を実感しており、インクルーシブインターンシップの活動場所の紹介、ボランティア後の活動を振り返るポートフォリオ作成の指示を行っている。しかし、インクルーシブインターンシップについては活動場所と学生個人とのマッチングや紹介先に限界があること、ポートフォリオの作成に関してはフォローが難しいことなど課題が残っている。また、「情報通信技術を活用した教育の理論及び方法」が必修化される中、講義の中でさらに学生がICT機器を活用する力をつけることができるようにすることも課題である。

中等教職課程では、1年次後期から始まる教職課程説明会から始まり、各年度4月に中等全体でオリエンテーションを実施することにより、1年間の見通しを持った学生生活を送ることが出来るように指導している。この他にも、随時、卒業生の現役教員による講演会、県教育委員会によるコンプライアンス研修、学校支援ボランティアへの組織的支援など、様々な取組を通して、教職履修学生全員が卒業までに実践的指導力を身に付けることを課題として取り組んでいる。

<根拠となる資料・データ等>

- ・ 学生便覧 2022 pp.115-181

基準項目 3-2 実践的指導力育成と地域との連携

〔現状説明〕

教職課程センターでは、学校園のボランティア・インターンシップ募集の情報を学生に提供しており、学生が附属幼稚園・附属小学校・連携学校園でのボランティアを申し込む際の窓口となっている。

初等教職課程では、次の取組を行っている。

- ・ 岡山市学校支援ボランティア、倉敷市学校園支援ボランティアへの登録を学生に呼びかけている。
- ・ インクルーシブ教育研究センターと連携し、各園の特に支援の必要な幼児を支援する「幼稚園サポートプロジェクト」を実施している。学生は、附属幼稚園と近隣にある特定の公立幼稚園へ定期的にボランティアに行き、振り返りの記録を残している。月に一度、教員や臨床心理士のコーディネーターが参加し、学内でカンファレンスを行っている。
- ・ 岡山県教育庁保健体育課より県下の大学に依頼のあった「体育授業スペシャリスト派遣事業」に児童学科9名の学生が参加し、小学校の体育授業の活性化に貢献しようとしている（今年度の実施は2学期以降の予定。昨年度は8名が申し込み、6名が実施した）。
- ・ 1年次から、インクルーシブインターンシップの授業をカリキュラム上に位置付け、保育・教育現場のみならず地域の事業所、NPO等の取組に参加して特別支援に関する視野を広げられる活動を単位化している。
- ・ 毎月1回程度のカンファレンスを実施して、インクルーシブインターンシップでの学びをリフレクションする機会としている。

- ・インクルーシブ教育研究センターと連携し、小学校に在籍する特に支援を必要とする児童を支援する「小学校サポートプロジェクト」を実施している。学生は、提携している小学校に定期的に入り、自分の活動の振り返りの記録を残している。月に1回程度、学内でカンファレンスを行い、活動のリフレクションを行う場としている。中等教職課程では、次の取組を行っている。
- ・実践的指導力の育成のために、教育実習事前事後指導において、教育活動に参画する意識を高め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに、教育実践に関する基礎的な能力と態度及び教育者としての課題を自覚できるよう、指導の充実に努めている。
- ・教員としての資質・能力の向上並びに教育上の諸課題に対応するため、岡山市教育委員会と連携協定を締結している。
- ・岡山市学校支援ボランティア、倉敷市学校園支援ボランティアおよび附属小学校でのボランティア活動を通して、教員に求められる資質や児童・生徒との関わり方など、多くのことを学ぶ機会となっている。
- ・教職相談室で、教職相談員から、教育活動全般についての個別指導が行われている。
- ・教職実践演習の特別講義講師として現職教員を招き、教育実践に関する基礎的な能力と態度及び教育者としての自覚の育成に努めている。
- ・1年次に特別支援教育基礎論、2年次、3年次に各教科教育法、各教科指導法演習における特別な配慮の必要な生徒への対応、4年次教育実習事前指導、教職実践演習など、インクルーシブ教育をカリキュラムに段階的に位置づけている。

〔長所・特色〕

教職課程センターでは、次のとおりである。

- ・岡山市学校支援ボランティアの学内説明会を主催している。
- ・岡山市・岡山県の教育委員会等と連携して、教員採用試験説明会、講師登録説明会を主催し、学内で開催している。

初等教職課程では、次のとおりである。

- ・「小学校サポートプロジェクト」での活動後に各自が記録を残し、参加学生で共有している。
- ・自身の活動を振り返って言語化したり、カンファレンスで共有したりすることが学生自身の学びとなっている。

中等教職課程では、次のとおりである。

- ・教育実習事前事後指導および教職実践演習では、教科別(教員免許状種別)の授業内容が編成されており、より実践に即した指導能力育成を図ることができる。

- ・現職教員による特別講義により、教育者としてのモチベーションの向上を図ることができる。
- ・教育実習での経験を教育現場に結び付けて考えることができる環境を整えている。
- ・元学校長の経験豊かな教職相談員による相談・支援により、職務内容を実地に即して理解し、教科指導以外の様々な場面でも適切に生徒と関わるることができる力を涵養している。

〔取り組み上の課題〕

初等教職課程では、インクルーシブインターンシップの活動のリフレクションと学生個人々人へのフィードバックに課題がある。

中等教職課程では、2020年度からのコロナ禍により、ボランティア活動等の体験活動の実施が難しい状況であった。また、今後は、ウィズコロナ、アフターコロナを見据えた取組や工夫が必要となる。

<根拠となる資料・データ等>

- ・ノートルダム清心女子大学 2022年度シラバス
<https://www.ndsu.ac.jp/department/syllabus.html>
- ・岡山市教育委員会との連携協定書
- ・特別講義一覧
- ・教職相談室利用者数

Ⅲ. 総合評価

本学教職課程において評価できることは以下のとおりである。第一は、建学の精神に則った本学の教育理念に基づいて、全学的に教職課程における教員養成の目的、目標を共有して教育を実施していることである。第二は、初等教職課程及び中等教職課程を軸に、各学科教職課程における学生一人一人に応じたきめ細かな指導を基本としていることである。第三は、各学科教職課程における指導を基本としつつ、教職課程センターを中核として、全学的に教職課程を運営する体制を整備していることである。第四は、大学の理念に即して設置されたインクルーシブ教育研究センターとの連携を図り、全学的にインクルーシブ教育を重視したカリキュラムを編成し教育を実施していることである。第五は、教育委員会との連携を図り、育成指標を踏まえた教員養成の実施に努めていることである。こうした建学の精神に則った本学の教育理念に基づく指導体制の充実によって、多くの女性教育者を養成し、地域社会に大きく貢献して、絶大な信頼を得ている。

今後の課題は、以下のとおりである。第一は、現在の緊要な課題となっている情報通信技術を活用した教育の実施に必要な環境整備に努め、実践的な取組を充実させていくことである。第二は、教職課程の実施に関する教職課程自己点検評価を充実させ、教職課程の質保証に向けて改善を図っていくことである。

Ⅳ 「教職課程自己点検評価報告書」作成プロセス

2022年6月に開催した教職課程センター所属の教職員による会議において、「教職課程自己点検評価報告書」の内容構成の確認を行い、初等教職課程及び中等教職課程の教員が分担して執筆し、教職課程主任、初等教育主事、中等教育主事の3名で内容の確認、編集をすることとした。2022年7月に関係教員に執筆依頼をして、9月原稿締切、10月～12月内容確認、編集とした。2023年2月作成完了し本学ホームページに掲載した。

V 現況基礎データ一覧

2022年5月1日現在

法人名 学校法人ノートルダム清心学園					
大学・学部名 ノートルダム清心女子大学（文学部・人間生活学部） ノートルダム清心女子大学大学院（文学研究科・人間生活学研究科）					
学科・コース名（必要な場合） 文学部（英語英文学科・日本語日本文学科・現代社会学科） 人間生活学部（人間生活学科・児童学科・食品栄養学科） 大学院文学研究科（日本語日本文学専攻・英語英米文学専攻・社会文化学専攻） 大学院人間生活学研究科（人間発達学専攻・食品栄養学専攻・人間生活学専攻 人間複合科学専攻）					
1 卒業者数、教員免許状取得者数、教員就職者数等 ※保育園勤務を含む					
①	昨年度卒業者数				学士課程 503人 大学院課程 10人
②	①のうち、就職者数 （企業、公務員等を含む）				学士課程 467人 大学院課程 8人
③	①のうち、教員免許状取得者の実数 （複数免許状取得者も1と数える）				学士課程 180人 大学院課程 2人
④	②のうち、教職に就いた者の数 （正規採用＋臨時的任用の合計数）				学士課程 113人 （教諭81＋保育32） 大学院課程 1人
	④のうち、正規採用者数				学士課程 85人 （教諭57＋保育28）
	④のうち、臨時的任用者数				学士課程 28人 （教諭24＋保育4） 大学院課程 1人
2 教員組織					
	教授	准教授	講師	助教	その他（助手）
教員数	41人	39人	13人	0	4人
相談員・支援員など専門職員数（教職相談員6人）					

大学基礎データ（2022年5月1日現在）より（対象年度2021年度）